

## 絵葉書にみる昭和初期の六甲山観光

富沢 かよ子

### はじめに

神戸市の背山である六甲山系は、市民に恩恵を与える一方、荒廃により市域に度重なる災害をもたらしてきた。明治期からは大規模な治山・治水事業がなされ現在は緑の山が復活し、都市景観を美しいものになっている。

市街地に隣接する山々は、昭和初期には神戸の代表的観光地だった。本稿は、六甲山系の二大観光地「六甲山」と「摩耶山」について、地形の特徴を概括したうえで、その観光資源を昭和初期に「名所・名勝」と題して発行された絵葉書から、検討することを目的とする。

なお、本稿では六甲山地の中でも東寄りで最高峰に近いエリアを「六甲山」、摩耶山頂を中心にかつて天上寺のあったエリアを「摩耶山」と呼ぶものとする。

## 1. 六甲山と摩耶山

### 1-1 六甲山系の地形と自然

「ろっこうさん」の呼称については諸説あるが、大阪から見て「むこうの山」と呼ばれた山々に、「武庫山」「六甲山」の漢字が当てられたことから、「ろっこうさん」になったという説が有力である<sup>1)</sup>。六甲山は特定の山の名称ではなく、東は宝塚市から西宮市、芦屋市、神戸市を東西方向に貫いて須磨浦海岸に接する 30km 超の山系を指し、いくつもの峰があり最高峰は標高 931m である。この山系は海の向こうの淡路島の北端に連なっていて、山稜に沿って阪神・淡路大震災を引き起こした野島断層を含む六甲・淡路島断層が走っている。摩耶山は標高 702 メートルで六甲山地に含まれる。

地質はほとんどが花崗岩で形成されており、もろく崩れやすい。また保水力・保養力に乏しいので、ひとたび荒廃すると植生の回復が難しい特質がある。明治初期の六甲山は、樹木の伐採や石材の採取により荒廃し、禿山になっていた。また六甲山系の南面を下る河川は急峻で、大雨で氾濫を繰り返す都度、堤防を高くした結果、多くの川が天井川となった。大雨になれば水を留めることができない山腹斜面は崩壊し、溢れた河川と土砂が川底より低い市街地に押し寄せる。この山系に接する神戸の市街地には、治山・治水が必要不可欠だった。

神戸市最初の砂防堰堤は水源工事として施工された。開港後の人口急増により伝染病等が発生し、生活環境を整備する必要から神戸市は 1893 (明治 26) 年より水道事業に着手、その後 1896 年(明治 29)年に河川法、1897 年(明治 30)年に砂防法、森林法を制定し、砂防・治山工事に着手した。1901 (明治 34) 年には水源域での砂防事業とあわせ、市街地への土砂災害防止を目的として造林事業を行うことを決め、1903 (明治 36) 年から本格的造林事業が実施された。阪神大水害による被害、戦争による中断等があったが植林は平成期まで続けられ、緑の六甲山が復活した。

気候的には、温暖な瀬戸内海気候区に属し、10 cm 以上の積雪日数は平年で冬期に2日程度である。山頂付近は降雨量が多く、ブナ林などの落葉広葉樹林が主体となる寒冷な気候となっている。

南麓の気候は温和で、北麓の気候は寒暖の差が大きい。

## 1-2 六甲山系の観光開発

1985年に六甲山に初めて別荘を建てたのは、居留地に住んだ英国人アーサー・ヘスケス・グルームである。グルームの勧めで友人たちが次々に別荘を建て、山上は別荘地となった。グルームは1903年に日本で初めてのゴルフ場「神戸ゴルフ倶楽部」を創設、やがて日本人富裕層も訪れるようになった。「山で遊ぶ」という発想がなかった日本人に、ゴルフ・登山・スキーといったスポーツは興味深かったことだろう。大正・昭和期になると交通系の企業が開発を推進し、別荘分譲地、ホテル、貸別荘、バンガロー村やテント村が整備され、乗り物で山へ行って景色や食事を楽しむ観光スタイルが定着した。こうして、外国人のレジャーに始まった六甲山は、都市に隣接したリゾート地として発展を遂げた。

摩耶山には、646(大化2)年に開創された忉利天上寺(とうりてんじょうじ)が存在し、修行僧や参拝者を集めた。そして、1925(大正14)年に摩耶鋼索鉄道株式会社(現神戸六甲鉄道株式会社)<sup>2)</sup>が摩耶ケーブルを開業したことで、この寺院を観光資源により多くの参拝者が集まるようになった。ケーブルカーを利用すれば険しい山道を歩くことなく詣でられるので、天上寺及びケーブル駅周辺は格好の観光地になった。さらに、1955(昭和30)年に、神戸市が摩耶山頂に遊園地とロープウェイを整備した<sup>3)</sup>ことで、寺院を中心としてきた摩耶山観光に変化が生じた。しかし、1970年代初頭に遊園地が閉園したことに加え、1976(昭和51)年に天上寺は焼失してしまい、摩耶山は観光資源を失ったといえる。

六甲山と摩耶山の観光資源(観光施設、交通機関等)の推移は表1の通りである。

## 2. 昭和初期に発行された六甲山と摩耶山の絵葉書

六甲山と摩耶山の名所・名勝を題した当館所蔵の絵葉書には、「六甲山登山記念」(資料番号: No.258-1~No.258-9)、「六甲名所」(資料番号: No.259-1~No.259-12)、「摩耶山名勝」(資料番号: No.13-1~No.13-6)の代表的な3つの資料群がある。

いずれも発行年の記載はないが、用いられた写真は昭和初期に撮影されたことがわかる。本章では、これらの絵葉書の掲載写真とスタンプから、昭和初期に紹介された六甲山と摩耶山の観光資源について検証したい。

### 2-1 「六甲山登山記念」(資料番号: No.258)

「六甲山登山記念」と題された No.258 のシリーズには9枚の絵葉書が残されている。1枚ずつに異なるスタンプが押されている点は特徴的である。この絵葉書群から昭和初期の観光目的、すなわち市民・観光客が六甲山系で楽しんだアクティビティを見てみると、景観、スポーツ、乗り物に大別できる(表2)。

袋には「SOUVENIR OF ROKKO」と題が印字され、各はがきに印刷されたテーマも英訳されている。開港以来の神戸に居留する外国人や、神戸港から訪れる外国人に向けた情報発信も意識されたことがわかる。

表1 六甲山・摩耶山における観光施設・交通機関の推移		
年号	事柄	
1895	M28	グルームが三国池付近に別荘を建てる
1903	M36	グルームが神戸ゴルフ倶楽部 開設
1912	T1	阪神クラブ 開設
1925	T14	摩耶ケーブル 開業
1925	T14	六甲阪急倶楽部 開設
1928	S3	裏六甲ドライブウェイ 開通
1929	S4	六甲山ホテル（宝塚ホテル六甲山分館） 開業（～2015）
1929	S4	表六甲ドライブウェイ 開通
1929	S4	摩耶山温泉 仮営業開始（1961摩耶観光ホテルとして再営業）
1931	S6	六甲登山架空索道（ロープウェイ） 開業（～1944）
1932	S7	六甲ケーブル 開業
1932	S7	山上周遊道路 開通
1934	S9	東六甲ドライブウェイ 開通
1934	S9	六甲オリエンタルホテル 開業（～2007）
1936	S11	凌雲荘 開業（～2001）
1937	S12	六甲カンツリーハウス 開業
1938	S13	<b>阪神大水害</b>
1945	S20	<b>第二次世界大戦終結</b>
1950	S25	六甲カンツリーハウス 再開
1952	S27	神戸ゴルフ倶楽部 再開
1952	S27	新池スケート場 開設
1955	S30	摩耶ケーブル 再開
1955	S30	奥摩耶ロープウェイ 開業
1955	S30	奥摩耶遊園地 開業（～1970年代初頭）
1956	S29	表六甲ドライブウェイ 再開
1957	S32	回る十国展望台 開業（～2002）
1961	S36	摩耶観光ホテル 開業（～1967） *～1994頃まで転活用
1961	S36	芦有道路 開通
1962	S37	裏六甲有料道路 開通
1964	S39	六甲山人工スキー場 開業
1970	S45	グランドホテル六甲スカイヴィラ 開業（～2022）
1970	S45	神戸摩耶ロッジ（後にオテル・ド・摩耶） 開業（～2021）
1970	S45	六甲有馬ロープウェイ 開業
1976	S51	摩耶山天上寺全焼
1976	S51	六甲山牧場 一般公開
1978	S53	六甲山フィールドアスレチック（現六甲山アスレチックパークGREENIA） 開業
1981	S56	六甲ケーブル山上駅展望台「天覧台」に改称
1991	H3	布引ハーブ園 開園
1991	H3	神戸布引ロープウェイ「神戸夢風船」 開業
1995	H7	<b>阪神・淡路大震災</b>
1995	H7	六甲ケーブル 再開
1995	H7	六甲有馬ロープウェイ（裏六甲線、表六甲線） 再開
2001	H13	摩耶ケーブル、摩耶ロープウェイ 再開
2003	H15	六甲ガーデンテラス 開業
2010	H22	六甲ミーツアート 開始
2019	H31	六甲山サイレンスリゾート 開業

表2 名勝と観光目的			
資料番号	資料名称	絵葉書写真のテーマ	スタンプ(文字・絵柄)が示すもの
2D-258-1	山間のロープウェイ	乗り物	スポーツ(「登山記念」)
2D-258-2	大楠公の銅像	景観	景観(最高峰)
2D-258-3	山上スキー場	スポーツ(スキー)	スポーツ(スキー)
2D-258-4	山上テント村	スポーツ(登山)	スポーツ(テント村)
2D-258-5	天狗岩よりの眺望	景観	スポーツ(「ハイキング」)
2D-258-6	天狗岩の印象	スポーツ(登山)	スポーツ(「MT.ROKKO」)
2D-258-7	ゴルフ場所見	スポーツ(ゴルフ)	スポーツ(ゴルフ)
2D-258-8	極楽溪の奇勝	景観	スポーツ(登山)
2D-258-9	天狗岩の景観	景観	乗り物(ドライブウェイ)

### No.258-1 (六甲山名勝) 山間のロープウェイ

1931(昭和6)年に開業した六甲山登り口駅と六甲山上駅1.567kmを結んだ六甲登山架空索道が掲載され、「六甲登山記念」の文字スタンプが押されている。

東洋一の長距離を謳い人気の高い乗り物だったが、第二次世界大戦中の1944(昭和19)年に、金属供出のため廃線となった。



### No.258-2 (六甲山名勝) 大楠公の銅像

1935(昭和10)年の楠公六百年祭を記念して六甲山頂に建てられた楠木正成像<sup>4)</sup>を被写体とし、「六甲山最高峰」の文字スタンプが押されている。

海拔932メートルの文字通り最高峰に設置されたが、像は第二次世界大戦中の金属供出で姿を消した。



### No.258-3 (六甲山名勝) 山上スキー場

1903(明治36)年開業の神戸ゴルフ倶楽部の冬の風景に、スキーヤーの絵柄と「六甲登山記念」の文字スタンプが押されている。

六甲山上のゴルフ場は冬場に閉鎖され、ウインタースポーツの場となっていた。写真の人々は軽装で、競技ではなく娯楽としてのスキーを楽しんでいたと思われる。



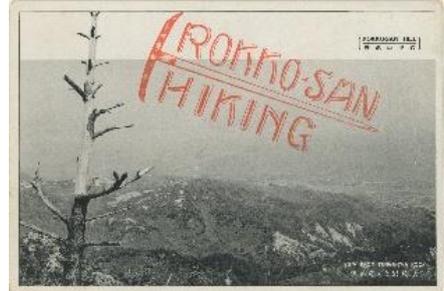
#### No.258-4 (六甲山名勝) 山上テント村

山腹に張られたテントの写真に、「六甲登山記念」の文字とテント村のイラストが描かれたスタンプが押されている。1932(昭和7)年に開業した六甲ケーブルの山上駅の東にあった天狗橋傍のテント村と思われる。



#### No.258-5 (六甲山名勝) 天狗岩よりの眺望

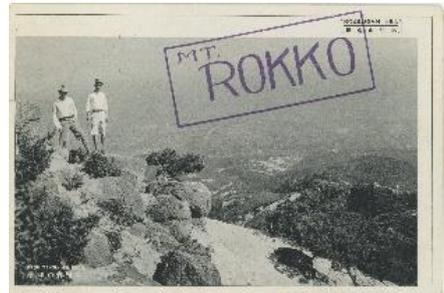
天狗岩からの大阪湾方向を見た風景に、「ROKKO-SAN HIKING」の文字とピッケルの絵が描かれたスタンプが押されている。この場所は現在も六甲山屈指のビューポイントで、阪神間、泉南方面、神戸市、淡路島までも見渡すことができる。



#### No.258-6 (六甲山名勝) 天狗岩の印象

西洋人と思しき登山者が天狗岩に立つ写真に、「MT.ROKKO」の文字スタンプが押されている。

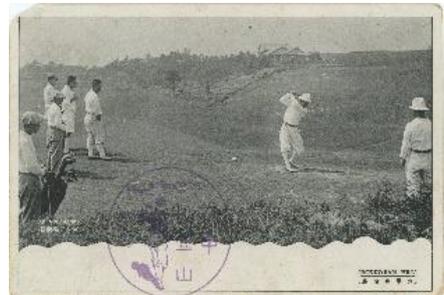
撮影場所は No.258-5 とほぼ同じである。眺望、登山径路、交通手段、宿泊施設の揃った天狗岩周辺は山上リゾート地として発展し、名勝として多くの絵葉書に登場する。



#### No.258-7 (六甲山名勝) ゴルフ場

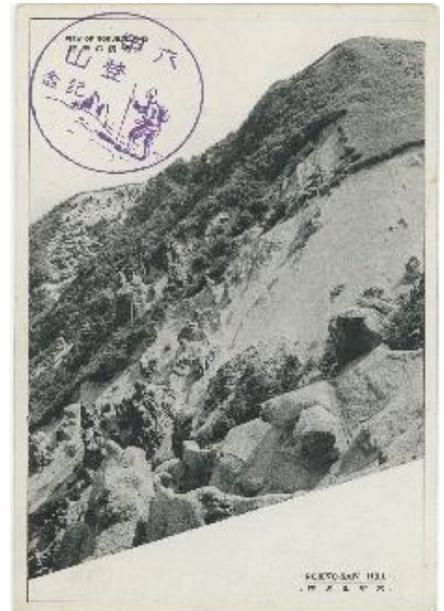
グループが1903年に開いた日本初のゴルフ場「神戸ゴルフ倶楽部」の風景写真に、ゴルフをプレーする人の絵と「六甲登山」の文字のスタンプが押されている。

明治期に居留地の外国人が根付かせた六甲山のゴルフ・登山・スキー・スケートといったスポーツが、昭和期の観光資源となって絵葉書に登場している。



#### No.258-8 (六甲山名勝) 極楽溪の奇勝

極楽溪と呼ばれた崖の写真に、杖を突いて登る登山者の絵柄と「六甲登山記念」の文字のスタンプが押される。現在の六甲ガーデンテラス(神戸市灘区六甲山町五介山1877-9)の東側にある極楽茶屋跡の南側の崖を撮影したと思われる。樹木に覆われている現状と違い、昭和初期には禿山だったことがよくわかる。



### No.258-9 (六甲山名勝) 天狗岩の景観

天狗岩を北から見た景観写真に、ドライブウェイを疾走する自動車の絵と「六甲登山観光記念」の文字が入ったスタンプが押されている。自動車で山頂へ行って景観やスポーツを楽しむ西洋的な観光スタイルも存在していたこと、それが理想的な姿として描かれたことが想像できる。



### 2-2 「六甲名所」(資料番号：No.259)

「六甲名所」と題された 12 枚の絵葉書からは、売れ筋のモノクロ写真に彩色を施したものを、オフセット印刷で量産・販売していたと推察される。彩色葉書は外国人観光客に人気が高く、タイトルに英訳が添えられていることから、外国人に販売する想定だったのだろう。すべての裏面に「六甲山頂玉房茶屋」のスタンプが押されているが、この茶屋は 1931(昭和 6)年と 1939(昭和 14)年発行の地図<sup>5)</sup>には登場せず、詳細は不明である。また、12 枚のうち 4 枚(No.259-3、No.259-5、No.259-6、No.259-9)にロープウェイの写真が用いられたように、この乗り物自体が観光客を集める観光名所だったともいえよう。

なお彩色前のモノクロ写真が含まれるシリーズとして、当館所蔵の「六甲名勝」(資料番号：No.11-1~No.11-8)を紹介しておきたい。No.259-1 は No.11-8、No.259-2 は No.11-4 の写真を彩色したもので、この場所が観光名所としてよく知られていたことがうかがえる。また No.11-7 と別写真で同じアングルの写真を着色したのが No.259-4 である。写真は異なるが No.11-1 はドライブウェイ、No.11-2 はロープウェイで、当時人気のあった名勝・名所の絵葉書が繰り返し販売されていたことがわかる。

### No.259-1 (六甲名勝) 六甲開祖の碑

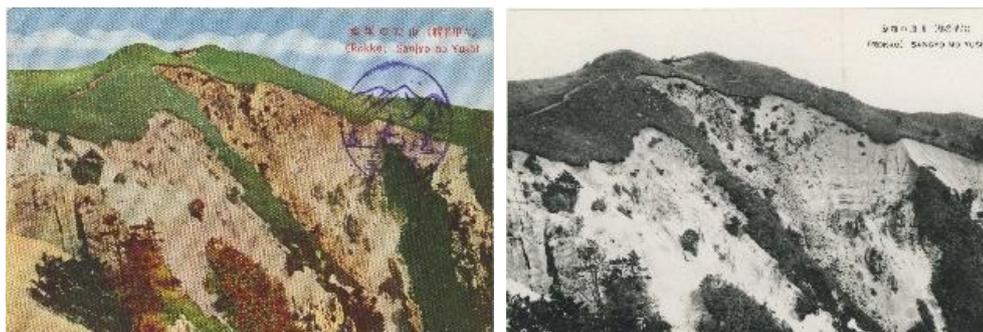
1912(明治 45)年に建てられた六甲山開祖グループの功績をたたえた石碑で、その周辺に学校の遠足らしい人々が集まっている。観光名所だったこの碑は反英運動の高まりにより昭和 15(1940)年に引き倒された<sup>6)</sup>。



▲参考：No.11-8

### No.259-2 (六甲名勝) 山頂の雄姿

写真は極楽茶屋跡の南面斜面で、左に見えるのは現在の全六甲縦走路と思われる。現在は植林され緑に覆われているが、撮影された頃は岩肌剥き出しだったことがわかる。



▲参考:No.11\_4

**No.259-3 (六甲名所) 山間を滑るロープ・ウェイ**

**No.259-5 (六甲名所) 山腹を縦走するロープ・ウェイ**

**No.259-6 (六甲名所) 溪谷を走るロープ・ウェイ**

**No.259-10 (六甲名所) 山麓ロープ・ウェイ昇口駅**

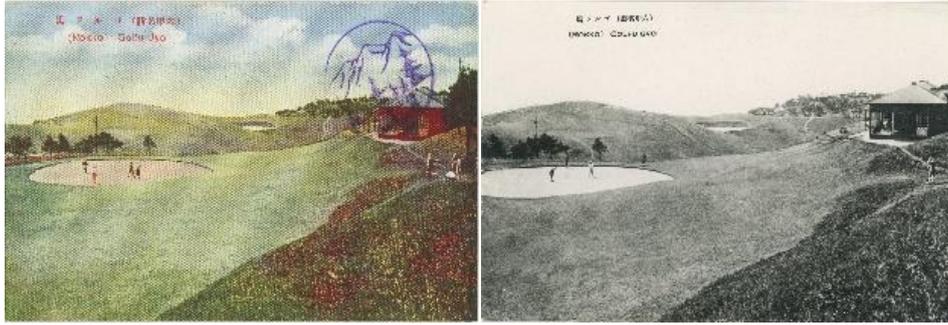
1931(昭和6)年9月竣工の六甲登山架空索道の写真が使用されていて、それ以降に発行されたことがわかる。いずれも雄大な山景を背景に運行されるロープウェイの姿で、人気を博した乗り物の写真を記念に持ち帰らせたり、手渡された人が魅力を感じて訪れたりするようにとの意図も感じられる。ロープウェイは六甲山を観光地として大いに発展させたといえるだろう。



▲参考:No.11-2

**No.259-4 ゴルフ場**

グループが1903(明治36)年に開いた日本初のゴルフ場・神戸ゴルフ倶楽部を撮影した写真が用いられている。関西を中心に多くの作品を残した建築家ヴォーリズによって、1932(昭和7)年に建替えられたクラブハウスが写っていることから、それ以降の撮影・発行とわかる。この建物は2007年に経済産業省の近代化産業遺産に認定され、2014(平成26)年には国の登録有形文化財(建造物)に登録された。



▲参考:No.11-7

### No.259-7 (六甲名勝)三国池

グループが六甲山で最初に別荘を構えた三国池湖畔の写真が用いられている。名勝として名高い三国池は、観光絵葉書にも採用されていたことがわかる。



### No.259-8 (六甲名勝)雲ヶ岩

六甲山最高峰付近には仰臥岩、雲ヶ岩、六甲比命神社(のご神体の磐座)、心経岩の巨石群がある。絵葉書裏面の左上に「雲ヶ岩」と印字されているが、この写真は雲ヶ岩ではなく、岩一面に般若心経が刻み込まれた「心経岩」である。



### No.259-9 (六甲名勝)スケート

撮影場所は No.259-7 と同じく三国池と思われる。六甲山上には天然沼池だけでなく氷採取のための人工池も多数あり、冬には天然スケート場となるので、山上生活者は滑走を楽しんだという<sup>7)</sup>。本格的なスケート場は 1950 年代になってから開設された。(表 1 参照)。



### No.259-11 (六甲名勝)雪のホテル前

写真は雪景色の六甲山ホテル前で、記念碑台の下から西を向いて撮影したものと思われる。ホテルが開業した 1929(昭和 4)年以降の写真だが、展望台や 1934(昭和 9)年建設の新館が写っていないことからそれ以前に撮影されたものであることが推察できる。



### No.259-12 (六甲名勝)ドライブ・ウェイ

ドライブウェイと坂道を昇り降りする自動車の写真が用いられている。周囲の地形から、1928(昭和 3)年に開通した裏六甲ドライブウェイとみられる。竣工したばかりのドライブウェイの絵葉書は多数発行された。



## 2-3 「摩耶名勝」(資料番号：No.13)

もうひとつの観光地である摩耶山の名勝を集めたシリーズ(No.13)と、代表的スポットの写真1点(No.158-1)を紹介する。摩耶山観光には、寺院参拝という六甲山では見られなかった要素が加わる。寺院を持たない六甲山に対し摩耶山は古くから修行の場という側面があり、摩耶山切利天上寺が参拝客を集めた。

「摩耶名勝」は袋の表書きから8枚組であることがわかるので、シリーズの1枚が欠落している。写真は摩耶ケーブルの駅、駅付近の様子、かつての天上寺の建造物である。

### No.13-1 (摩耶名勝)頂上摩耶駅

摩耶ケーブルは摩耶山切利天上寺への参詣路線として1925年(大正14)年に開業した。運営する摩耶鋼索鉄道株式会社は、駅付近の整備にも力を注いだ(No.13-2、No.13-6参照)。写真は摩耶駅(現「虹の駅」)で、この建造物は現在も使われている。



### No.13-2 (摩耶名勝)休憩場外景

摩耶ケーブル山上の摩耶駅を降りたところに、摩耶鋼索鉄道株式会社が整備した遊園地の写真である。遊具で遊ぶ子供と食堂・売店の建物が写っている。動物小屋があることから、1926(大正15)年以降の発行であることがわかる<sup>8)</sup>。



### No.13-3 (摩耶名勝)天上寺本堂

摩耶山切利天上寺の本堂に参拝客が訪れている写真である。摩耶ケーブルの駅から参道を登り石段を登り詰めると、この本堂が正面にあった。本堂手前の右に多宝塔、左には夫人堂が見える。



### No.13-4 (摩耶名勝)奥の院

焼失した天上寺は工事が困難な場所に建っていたため、寺の敷地と神戸市所有の土地を交換して、現在の場所(神戸市灘区摩耶山町2-12)に再建されることになった。この奥の院は元の敷地にあったもので、本堂から離れていたため焼失を免れたが換地の後に撤去され現在は存在しない。



### No.13-5 (摩耶名勝)頂上の塔

本堂の右側にあった多宝塔の写真で、観光客が写りこんでいる。この建物は1976(昭和51)年の火災で焼失した。現在この場所は摩耶山史跡公園になっており、礎石などから位置を確認できる。



### No.13-6 (摩耶名勝)休憩所

摩耶ケーブル駅周辺の写真で、No.13-1の近くにあった休憩所を撮影している。幼い子供が写っていることから、ケーブルによって参拝が容易になり、天上寺が家族で訪れる場になったことが想像できる。この場所は現在、展望台になっている。



### No.158-1 神戸摩耶山

天上寺参道の330段の石段の写真で、階段上のガス灯(実際は灯油)が写りこんでいる。同アングルの絵葉書が量産されていることから、この場所は撮影スポットだったと思われる。人々の服装から、目的は登山ではなく寺に参拝することだったことが読み取れる。



2章で紹介した絵葉書群を表2の分類に沿って観光目的別に整理すると、六甲山と摩耶山の観光目的の違いがよくわかる(表3)。六甲山は自然・眺望やスポーツ、摩耶山は寺院参拝が中心となっており、開山の歴史の違いが後世の観光資源にも影響を与えていることは明らかである。

写真の撮影場所	資料番号	資料名称	景観	スポーツ	乗り物 (関連施設含む)	寺院
六甲山	2D-259-1	六甲開祖の碑	○			
	2D-259-2	山頂の雄姿	○			
	2D-259-3	山間を滑るロープ・ウェイ			○	
	2D-259-4	ゴルフ場		○		
	2D-259-5	山腹を縦走するロープ・ウェイ			○	
	2D-259-6	溪谷を走るロープ・ウェイ			○	
	2D-259-7	三国池	○			
	2D-259-8	雲ヶ岩	○			
	2D-259-9	スケート		○		
	2D-259-10	山麓ロープ・ウェイ昇口駅			○	
	2D-259-11	雪のホテル前	○			
	2D-259-12	ドライブ・ウェイ			○	
摩耶山	2D-13-1	頂上摩耶駅			○	
	2D-13-2	休憩場外景			○	
	2D-13-3	天上寺本堂				○
	2D-13-4	奥の院				○
	2D-13-5	頂上の塔				○
	2D-13-6	休憩所			○	
	2D-158-1	神戸摩耶山				○

### おわりに 一観光資源の変容一

六甲山観光の系譜は、「六甲山登山記念」「六甲名所」で紹介された観光資源に始まる。これらの絵葉書からは、登山やスポーツを楽しみ、六甲ケーブルやドライブウェイを利用して景勝地や造られた観光スポットを訪ねるレジャー型観光が中心だったことが読み取れた。第二次世界大戦中はケーブルもロープウェイも金属供出のため廃止を余儀なくされたが、ケーブルが撤去作業に至らずに終戦となったことが幸いし、復興は早かった。1950年以降は六甲ケーブル山上駅を基点に、観光施設、宿泊施設、企業の保養所などが建設される。2000(平成12)年以降は過去の施設の跡地利用(凌雲荘⇒六甲ガーデンテラス)やリニューアルオープン(六甲山ホテル⇒六甲山サイレンスリゾート)など、更新を重ねながら余暇を楽しむ人々が訪れる地として継続している。2010年からはエリア一体を活用したアートイベント(六甲ミーツ・アート)が開催され、新たな客層を呼び込むことにも成功している。

一方、昭和初期までの摩耶山観光は切利天上寺を中心に発展した。絵葉書「摩耶名勝」に含まれるのは、天上寺の建造物と参拝する人々のために敷設されたケーブルの駅周辺である。観光資源が寺院であった点が、六甲山と大きく異なると言えよう。戦中の金属供出によって営業を停止した後、摩耶ケーブルは1955(昭和30)年に再開した。神戸市はこれに合わせ掬星台<sup>9)</sup>に展望台やジェットコースターを備えた「奥摩耶遊園」を整備、遊園地とケーブル山上駅を奥摩耶ロープウェイで結んだ。このことで摩耶山観光に変化が生じたが、遊園地は20年足らずで閉園、1976(昭和51)年に天上寺が火災で焼失し、「摩耶名勝」に見られた風景や賑わいは完全に失われてしまった。新たに観光資源を模索することになった摩耶山だが、掬星台が国内屈指の夜景スポット<sup>10)</sup>とし

て知られるようになった。2005(平成 17)年に財団法人神戸市都市整備公社(現在の一般財団法人神戸住環境整備公社)が、まやビューライン<sup>1)</sup>も含めた整備を行い、外国人旅行者も含め観光客を集める場所となっている。天上寺は山頂北側の創建の地に再建中で、参拝客は途絶えていない。さらに近年は地元団体の案内で廃墟(摩耶観光ホテル)や遺構(奥摩耶遊園)などを巡る「マヤ遺跡観光」が注目されている。

また、六甲山・摩耶山の魅力ある自然を活用し、自然保護との最適なバランスを保ちながら活性化を図ることを目的として神戸市は「六甲山再生委員会」を設置し、六甲山の目指すべき方向性及びそれを実現するための方策について協議を行い、2019年3月に「六甲山ランドデザイン」が策定された<sup>2)</sup>。

## 謝辞

本稿の調査・研究にあたり、有益なご教示をいただきました。ここに改めて深謝いたします。

前田 康男(「六甲歴史散歩会」主宰、神戸史学会会員、神戸ヒヨコ登山会会員)

## 参考文献

- ・平凡社地方資料センター『郷土歴史大辞典 兵庫県の地名 I』平凡社 1999年
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 産業経済編Ⅳ 総論』神戸市 2014年
- ・森田康之助『湊川神社史・下巻(鎮座篇)』湊川神社 1987年
- ・福原勝之助『六甲山頂記念碑付近明細地図』六甲山ホテル 1931年
- ・為定重行『最新実測六甲山頂明細図』親交会 1939年
- ・新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 生活文化編』神戸市 2020年
- ・六甲摩耶鉄道株式会社社史編集委員会『六甲ケーブル開業 50年史 六甲山とともに六十年』六甲摩耶鉄道株式会社 1982年
- ・財団法人日本経営史研究所『阪神電気鉄道百年史』阪神電気鉄道株式会社 2005年
- ・京阪神急行電鉄株式会社 茂原祥三『京阪神急行電鉄五十年史』京阪神急行電鉄株式会社 1959年
- ・神戸市建設局公園砂防部六甲山整備室『六甲山森林整備戦略』神戸市 2012年

## 注

- 1) 平凡社地方資料センター『郷土歴史大辞典 兵庫県の地名 I』平凡社、1999年、p.97
- 2) 六甲摩耶鉄道株式会社は2013年に阪神総合レジャー株式会社との合併により六甲山観光株式会社に社名を変更。2024年に神戸六甲鉄道株式会社に社名変更し、観光事業を(新)六甲山観光株式会社に会社分割した。現在、摩耶ケーブルは株式会社こうべ未来都市機構が運営している。
- 3) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 産業経済編Ⅳ 総論』神戸市、2014年、p.717
- 4) 森田康之助『湊川神社史・下巻(鎮座篇)』湊川神社、1987年、p.364
- 5) 福原勝之助『六甲山頂記念碑付近明細地図』六甲山ホテル、1931年。為定重行『最新実測六甲山頂明細図』親交会、1939年
- 6) 1942(昭和 17)年とする記述が散見されるが、1940(昭和 15)年が正しい。1940(昭和 15)年 11月20日付『神戸新聞』「偽善碑ぶつ倒し 六甲山上英人開祖碑消ゆ」、同年 11月20日付『朝日新聞』「六甲の英國 つひに倒る」
- 7) 新修神戸市史編集委員会『新修神戸市史 生活文化編』神戸市、2020年、p.220
- 8) 『六甲ケーブル開業 50年史 六甲山とともに六十年』六甲摩耶鉄道株式会社、1982年、p.188
- 9) もとは第二次大戦時に旧陸軍が高射砲陣地として切り開いた場所。

- 10) 函館山(北海道函館市)、稲佐山(長崎県長崎市)とともに「日本三大夜景」と呼ばれる。選定者や選定時期は不明。
- 11) 摩耶山の山麓～山上を摩耶ケーブルと摩耶ロープウエイで結ぶ路線の公式愛称。
- 12) 地元住民や民間事業者、学識経験者や国、県、市で構成。<https://www.city.kobe.lg.jp/a64051/shise/kekaku/kezaikankokyoku/rokkomaya/granddesign.html>